

# A-60 現代社会における母乳栄養の再検討

日本女大家政

○荒井 基

武藤静子

目的 人工栄養品の進歩、普及、女性の職場進出、母乳汚染などによって母乳栄養児は減少の一途をたどつていこうした複雑な現代社会において母乳栄養の意義を再検討するため、母乳成分の分析、母親の栄養状態と母乳成分の関係、母親の母乳に対する意識調査、母乳栄養児の罹患状況などを調べた。

方法 昭和47年4月～12月までに千葉県下の某病院に入院分娩した97名の産婦を対象として初乳中の総蛋白質、乳清蛋白質、PCB含量などと測定した。蛋白質定量にはミクロキエールダール法、免疫蛋白質はフクリールアマイドゲルを用いる平板式電気泳動法、PCBはECDガスフロマトグラフィーを用いて定量した。母親の栄養摂取状況、母乳に対する意識、乳児の罹患状況については質問紙法を用いて調査した。

結果 初乳中の総蛋白質量、乳清蛋白質量は日本における他の研究成績よりはやや高く、NRCの分析値に近い値であった。母親の栄養摂取状況と母乳成分の関係については、栄養摂取状況良好な者の母乳中の蛋白質含量が、分泌不良な者のそれより僅かながら高い傾向が認められたが、免疫蛋白質含量については目下検討中である。

PCB含量は母乳分泌の良好な14例のみについて測定したが、 $0.006 \sim 0.028 \text{ ppm}$ の範囲であった。母乳栄養を実施した母親の93%は母乳栄養法が乳児に最良であると答えている。また出生後6ヶ月の乳児の罹患状況については、母乳栄養児の健康状態が人工栄養児や混合栄養児に比べて特にすぐれているという結果は得られなかった。